

学校・家庭・地域の協働が創り出す子どもと大人の学び ——京都市立高倉小学校「スマイル21プラン委員会」の位置づけと役割——

福嶋 祐貴

1. はじめに

平成29年改訂学習指導要領においては、「社会に開かれた教育課程」が重要な柱の一つとして位置づけられている。学校が自己完結するのではなく、社会と理念や目的を共有しながら、地域と連携し、そこに顕在または潜在する人的・物的資源を活用していくことが、実践的な課題の一つとして求められている。

本稿で取り上げる京都市立高倉小学校（以下、高倉小）は、そうした課題に関して先駆的な取り組みを行ってきた。学校運営協議会制度化以前より、同等の組織「スマイル21プラン委員会」（以下、「スマイル」）を発足させ、地域と一体となって教育に取り組んでいる。拙稿（2017）で述べたように、「スマイル」には地域住民・保護者・教職員ら100名以上が在籍し、七つの部会に分かれ、それぞれ特色ある取り組みを企画・運営している¹。筆者はそのうち「学び部会」に平成25年度から所属し、平成28年度と平成29年度には同部会部長を務めた。同部会は、子どもたちに豊かな学びの場を提供し、実現したい学びの姿を追求してきた。

言うまでもなく、「学び部会」は、学校における子どもたちの学びの一部に介入している。学校運営協議会が制度化され、文部科学省が「地域学校協働活動」の取り組みを推進する現在、同じく保護者や地域住民のボランティアによる子どもたちの学びの支援が、全国で見られるようになっていく²。

武井哲郎は、「ボランティアによる学校への支援を充実させるための核として学校運営協議会が位置づけられることになれば、その影響は学びの場にまで及ぶ可能性があることを視野に入れなければならない」と述べ³、ボランティアによる学習支援が及ぼす（主としてネガティブな）影響を検討している。武井は、分析の結果、「教師が自身の専門性を発揮しようとする領

域にボランティアが足を踏み入れることの困難性」を明らかにしたうえで⁴、そうしたボランティアとの協働・連携にあたり、学校には「教師と異なる立場から子どもに接するという役割を保護者・地域住民に付与し、学校の指示や意向に沿って行動することだけを求めない姿勢が必要となる」とまとめている⁵。こうした武井の研究を念頭に置けば、全国的に家庭・地域によるボランティア事業が行われている中、それがネガティブな影響を及ぼさないようにするために、それらがどのような位置づけを果たすべきかを問い直すことが切実に求められると言える。

武井の研究で対象とされている「ボランティア」は「学校の授業に継続して携わるボランティア」を指している⁶。「学び部会」はそれとやや異なるものであると言えるものの、拙稿（2017）で述べた取り組みも実質的に「教師が自身の専門性を発揮しようとする領域」に「足を踏み入れる」ものであったため、それが果たすべき「教師と異なる立場」とは何なのか、その内実を検討しておくことが有用である。

そこで本稿では、「スマイル」のうち特に「学び部会」が果たすべき役割と、有する独自性は何なのかを探ることとする。そのために平成29年度に展開された取り組みを検討する。平成29年度の「学び部会」は、自身の位置づけを原点に立ち戻って検討するのに加え、子どもだけでなく大人に対しても新たな役割を果たすこととなった。次節以降、まず平成29年度の「スマイル」全体の活動を述べ、続いて「学び部会」の取り組みを検討することで、上述した問いを追究する。

2. 平成29年度「スマイル21プラン委員会」の活動

（1）平成29年度のテーマ

「スマイル」の略史については既に拙稿（2017）に

まとめているとおりである。「スマイル」は、学校運営協議会制度が発足するよりも早く立ち上げられ、学校運営に対する地域の参画を促してきた。その土台には、高倉小が番組小学校に由来する背景を持っていること、およびそれによる地域住民の学校に対する強い愛着と熱意とが見られる。それにより、伝統文化に根差した地域との連携による取り組みの多彩さとその蓄積の豊富さ、そして協力体制の持続性を実現してきた。

平成 28 年度は、前年度に引き続き“繋ぐ・TSUNAGU・つなぐ”をテーマに、学校と家庭を結びつけ（“繋ぐ”）、校区内外・日本全国・世界と学校とを関わらせ（“TSUNAGU”）、過去と現在の取り組みを継いでいながら未来を展望する（“つなぐ”）という理念のもと、伝統的な視点とグローバルな観点とを取り入れ、長年の蓄積を今後に生かす取り組みを行った。

「スマイル」の委員長は任期が 2 年間となっており、平成 29 年度からは新たな委員長が着任した。テーマも刷新され、「子どもと地域の架け橋～子どもたちにどんな橋をかけますか？～スマイルレインボーブリッジプラン」というテーマが掲げられた。地域とのつながりという原点を見つめ直し、より質の高い取り組みを目指していくという方向性が打ち出されたのである。

ちなみに「レインボー」とは、「スマイル」を構成する七つの部会（コミュニケーション部会、読解部会、人・まち部会、学び部会、体力向上部会、評価部会）のことを表している。このことにちなんで、各部会のテーマカラーも決められた。平成 28 年度に、マスコットキャラクター「すまっぴい」に各部会ごとのパリエーションが作成されたことも相俟って、各部会がよりいっそう自らの特色を生かすようになっていく。

（2）平成 29 年度「スマイル」の組織状況

「スマイル」の現状と気運を表す指標として、構成員の人数を確認してみよう。平成 29 年度の「スマイル」の委員は、教職員を含め 124 名である。平成 28 年度が 115 名だったため、9 名の増加ということになる。この増加の幅は大きく、少なくとも筆者が「スマイル」に参加し始めた平成 25 年度以来、過去 5 年間の「スマイル」の委員の数（表 1）からすれば最大である。

表 1 では、参考指標として、教職員の委員数（高倉小の教職員の中で「スマイル」のいずれかの部会に属

表 1 過去 5 年間ににおける委員数・児童数の推移

年度	25	26	27	28	29
委員数	117	117	117	115	124
教職員の委員数	40	38	39	41	41
教職員以外の委員数	77	79	78	74	83
全校児童数	667	675	678	708	719

しているか、事務局等いずれかの役職に就いている者の数）、教職員以外の委員数（委員数から教職員の委員数を差し引いた数）、全校児童数（高倉小に通う全 6 学年の児童数）も記入している。なお、児童数は毎年 5 月 1 日付けで発表されている京都市教育委員会教育調査統計学校現況調査のうち、「合計児童数」として示された数を引用している。

京都市の調査統計から、平成 28 年度から平成 29 年度の間に、全校児童数も 11 名増えていることがわかる。単純に考えれば、児童数が増えるということはそれだけ多くの保護者が学校に関わるようになるということである。「スマイル」委員が基本的には家庭・地域他関係者に対する公募によって募集されていることと考え合わせれば、平成 29 年度の「スマイル」委員数の増加は、「スマイル」委員になりうる保護者の増加に伴う、自然な変化であると見ることもできるかもしれない。

しかしながら、表 1 において過去 5 年間の児童数の増加と「スマイル」委員数（特に教職員以外の委員数）の推移を見れば、必ずしも児童数の増加が委員数の変化につながっていないことが分かる。教職員以外の委員数は、そのまま保護者・地域住民と教育関係者の数を表している。平成 27 年度から平成 28 年度への変化と平成 28 年度から平成 29 年度への変化はとりわけ対照的なものとなっている。

平成 29 年度の「スマイル」委員数の増加には、たとえば PTA のクラス委員と「スマイル」委員との役職の関連性に関する制度の見直しが行われたことや、「スマイルだより」などによる広報活動が強化されたことが関わっている。実際に子どもたちと触れ合う活動は別として、「スマイル」の運営に関わる会合は夕方以降に行われることが多い。そのため、学校への取り組みに参加したくとも、従来は仕事等で昼間の PTA に参加することが困難であった保護者や地域住民も、「スマイル」を通してであれば学校に参画することが可能となる。こうしたことを踏まえれば、「スマイル」の委員数の増加は、家庭・地域の持つ学校参画に対す

表2 過去5年間に於ける「学び部会」部員数の推移

年度	25	26	27	28	29
全体の委員数	117	117	117	115	124
「学び部会」部員数	16	17	16	15	18
教職員の部員数	4	5	5	5	6
教職員以外の部員数	12	12	11	10	12
新規部員数	-	9	8	6	11
継続部員数	-	8	8	9	7

る意欲の高まりを示唆しているとも言える。また、平成28年度に「博報賞」を受賞したことも、家庭・地域の関心を高める起爆剤となっている。

(3) 平成29年度「学び部会」の組織状況

家庭・地域の関心・意欲の高まりによって、平成29年度に「スマイル」全体の規模が大きくなったことは今確認したとおりであるが、「学び部会」単体として見た場合、どのように変化しているであろうか。部会単独でのデータは表2のとおりである。

表2には、全体の委員数(再掲)と「学び部会」部員数に加え、教職員の部員数(「学び部会」に属する教職員の数)、教職員以外の部員数(部会全体の部員数から教職員の部員数を差し引いた数)、新規部員数(教職員も含め、前年度に「学び部会」に属していなかった部員の数)、継続部員数(教職員も含め、前年度から「学び部会」に属している部員の数)を記している。これらは、各年度の部会の組織表(部会ごとに所属部員の名前をリスト化した表)から算出したものである。

なお、筆者が「スマイル」に参加したのは平成25年度からであり、平成24年度の名簿は所持しておらず、平成25年度の新規・継続部員数は算出不可である。また、「スマイル」全体で見た場合、部員が部会間で異動することがしばしばあり、算出が困難であるため表1には新規・継続委員数にあたる数は掲載しなかった。

さて、表2からまず窺えることは、「学び部会」単体として見れば、教職員以外の部員数の変化はさして目立つものではないという事実であろう。「スマイル」を構成する部会が7部会あることを踏まえれば、部会単体での増加数としては妥当なものである。

しかしそれよりも注目すべきは、平成29年度の部員数のうち新規部員数が占める割合である。平成29年度の場合、前年度から引き続き「学び部会」に所属することを決めた部員が7名であるのに対し、新しく

所属することとなった部員が11名にのぼっている。この数は、少なくとも過去5年間では最大である。とりわけ、継続部員数のほうが新規部員数よりも多かった平成28年度の状況とは対照的であると言える。

平成29年度の「学び部会」は、こうした組織状況にあり、前年度に比べてポスター・セッションに関する共通理解が図りやすい状況ではなかった。その中で、平成29年度「学び部会」の取り組みは、基本的な路線としては平成28年度と同じくポスター・セッションの学習を軸としつつ、平成28年度に浮かび上がってきた課題に対処すべく、重点を移すこととした。部会の継続性に伴う共通理解の樹立と、新たな取り組みとのバランスをとる形で活動した。次節では、平成28年度の取り組みを簡単に振り返ったうえで、平成29年度の取り組みを詳しく述べる。

3. 「学び部会」による子どもの学びへの介入

(1) 平成28年度の取り組み

拙稿(2017)で報告したとおり、平成28年度の「学び部会」は、それまでの三年間の蓄積を生かし、子どもたちのポスター・セッションによる発表の質を高めることを目指した。高倉小では、総合的な学習の時間の成果を、子どもたちが「たかくら学習発表会」で発表する。総合的な学習の時間「たかくら学習」は、「子どもたちが生活している地域社会を学習の基盤に、子どもの興味・関心や地域・学校の特色を生かした学習活動を通して、社会生活や自然環境等についての認識を深め、小学生なりの生き方を探求実践する資質や能力、態度を育成する」⁷ことを目標としている。

4年生の場合、障害を抱える人やお年寄り・妊婦などに向けた高倉校区の「やさしさ」を追究する、「高倉のやさしさ」をテーマに探究に取り組む。そしてその成果をポスター・セッション形式で発表することになる。それに向けて、部会でポスター・セッションについて学習する機会を提供し、発表の質を高めようというのが平成28年度の趣旨であった。

その目的を達成すべく、平成28年度「学び部会」では、まず例年と同様、部会授業(スマイル講座)として「ポスター・セッションのひみつ」と題する授業を行い、ポスター・セッションの仕方や慣習について子どもたちが学べるようにした。加えて、平成27年度

までの取り組みを通して思い描いてきた理想的なポスター・セッションの在り方を、ループリックの形で明文化した。このループリックには「高倉のやさしさ 発表のポイント」（以下、「発表のポイント」）というタイトルを付けた。それは、大人が子どもの発表を評価するためのツールというよりもむしろ、子どもたちが自らの発表練習を振り返り、よりよい発表ができるように自己評価・自己改善を図っていくためのツールとして機能させるためであった。

このように、平成 28 年度の取り組みは、「スマイル」全体のテーマ「繋ぐ・TSUNAGU・つなぐ」のうち、特に過去と現在、そして未来を「つなぐ」ことに重点を置くものであった。つまり、平成 25 年度以来の蓄積を踏まえ、現在の部会員が持っている理想的なポスター・セッションの姿を明確な形として示し、未来の学びと成長につなげていくということである。

全体で「子どもと地域の架け橋」というテーマを掲げた平成 29 年度の取り組みは、平成 28 年度のものを基本的には踏襲しつつ、より質の高い取り組みとなることを目指したものである。スローガンとして「子どもと大人で築きたい、恵み豊かな学びへのアーチ」、キャッチコピーとして「学びを豊かにし、広めていくための方法について、子どもと大人、みんなで学んでいけるよう、部会から提案・発信していきます」を掲げた。そのうえで、「総合的な学習の時間における探究的な学びの方法とポスターセッションによる発表の仕方について、部会授業を中心に、子どもと大人に発信していく」ことを目的として活動紹介を行った。年間の活動は表 3 のスケジュールで進化した。

具体的に、子どもに対しては、大きく二点で改善を図った。第一に、部会授業のリアリティを高めること、第二に、子どもたちの発表に対する着眼点を焦点化することである。

表 3 平成 29 年度「学び部会」活動スケジュール

5 月 31 日（水）	第 1 回推進委員会・第 1 回部会
9 月 16 日（土）	堀川高校探究基礎研究発表会見学
9 月 19 日（火）	第 2 回部会
11 月 7 日（火）	第 3 回部会
12 月 2 日（土）	親子トイレ掃除
12 月 6 日（水）	部会授業
12 月 18 日（月）	第 2 回推進委員会・第 4 回部会
2 月 22 日（木）	たかくら学習発表会
3 月 2 日（金）	第 3 回推進委員会・第 5 回部会

（2）部会授業のリアリティを高める方策

既に述べたように、ポスター・セッションに関する学習に着目することとなった平成 25 年度以来、「学び部会」は、ポスター・セッションにあまり馴染みのない子どもたちに向けて、ポスター・セッション形式での発表を演示するという部会授業を行っている。

「スマイル」では、各部会が活動の一環として「スマイル講座」を開く。授業は、それぞれが連携する学年に向けて行われる。たとえば、「人・まち部会」の場合は、3 年生に向けて、高倉校区の「達人」たちがそれぞれ自分の仕事を紹介し、その伝統や意義などについて、子どもたちに学んでもらうという部会授業が提供されている。衣服や食など、高倉校区を支える豊かな伝統文化の資源を生かした部会授業となっている。

既に述べてきているように、「学び部会」は、平成 25 年度以来、「ポスターのひみつ」と題した授業を 4 年生に向けて行ってきた。それは簡単に言えば、部員による模擬ポスター・セッションである。教職員の部員は子どもたちの誘導やサポートに回ることになるため、実質的には保護者あるいは地域住民による発表となる。セッションは通例二回行われ、子どもは一回目のセッションで雰囲気学んだうえで、二回目のセッションに活発に参加してくるものと見込まれている。しかしながら、この区分けは厳密に行っているわけではない。すなわち、既に発表等のやりとりになじみのある子どもの場合、一回目のセッションの時点から積極的に参加することも当然ある。セッションが二回終わると、子どもたちに感想や意見を述べ合ってもらい、そして最後に、部員である京都市立堀川高等学校の校長が、ポスター・セッションのポイントや、発表・探究における心構えについてレクチャーする。以上が「学び部会」による部会授業の流れである。

この授業が初めて行われた平成 25 年度には、発表者を一人のみとしてセッションを二回行った。つまり、子どもたちは二回とも同じ発表を聞くことになる。このとき、一回目のセッションは発表者以外の部員が聴き手となって、事前の打ち合わせどおり質疑応答を繰り広げることとした。その結果、二回目のセッションは盛り上がり、にぎわいが収まらないまま終了時刻を迎えた。この年は、3 学級 114 名の子どもを相手に、学校内の畳教室（ランチルーム）で授業を行った。

しかしながら、「たかくら学習発表会」本番は体育館で開催される。加えて、一般的なポスター・セッションと同様、複数名の発表者がそれぞれのブースで発表をするのであり、人数比も発表者1名に対して聴き手は多くともせいぜい10名程度である。そうすると、部会授業での模擬セッションは、発表会本番のシミュレーションとしてはリアリティを欠くものである。

平成26年度には、こうした課題への対策が練られた。セッションを二回行うのは前年度から変更なしであるが、会場を体育館に、発表者は二人にした。二人はそれぞれ異なる内容を発表する。3学級103名の子どもは二つのグループに分かれ、一回目と二回目で別の発表者のセッションに参加する。こうすることで、一つの発表ごとの聴き手が小規模になり、また二回のセッションで別々の内容を聴くことができ、やや本番に近い形式をとることができるようになった。その後、平成28年度までは同様の形式で実施された。

ところが、児童数が増加していくにつれ、この形式にも課題が見られるようになった。平成29年度になると、4年生の児童数は4学級125名にまで増えた。こうすると、二つのグループに分けるだけではセッションの参加度合いにかなりのばらつきが見られるようになる。例えば一番後ろで聴いている子は、前方の子に比べて発表者とやりとりしにくい。マイクを使えば解決するが、同じ会場で同時に二つのセッションが行われているため混乱が生じてしまう。これらから、部会授業はリアリティという点で問題を抱えることとなり、部会の中で解決策に関して議論が交わされた。

また、同様の取り組みを継続してきた時点で、一度原点に帰って取り組みの本質を見つめ直すための議論も生じてきた。大人がポスター・セッションを行うということ自体が重要なのか、子どもたちにセッションを見せるということが大事なのかという問題であった。大人全員が発表すればそれだけグループは多くなり、一つのグループあたりの規模の縮小は見込めるが、果たして本当にそれが目的であるべきかが問われたのである。むしろ、数を絞り、セッションの質を高め、子どもたちがよりよく学べるような形式を目指すべきではないかという意見が共有されていった。

そうした議論を重ねた結果、平成29年度は、発表者を三人に増やし、子どもたちを三つのグループに分

けることとなった。その一方で、セッションは二回のままとした。三回のセッションを従来どおり1時間で実施しようとすれば、一つのセッションあたりの時間が少なくなるほか、移動時間等で最後のレクチャーの時間も削られてしまうという点を懸念した結論である。

そのうえで、二回のセッションのうち、一回目は担任団によって事前に決められた発表者のところに聴きに行くことになるが、二回目に残る二つの発表のうち自分の興味のあるほうに行きよという形式にした。こうすると、どの子どもも残る一つの発表を聴くことができなくなる。それに伴い生じうる不満を解消するため、従来そのまま片付けていたポスターを、平成29年度は部会授業後に4年生の教室の近くに掲示することとした。こうすることで、自分の聴けなかった発表のポスターはもちろん、発表を聴きに行っていない距離的な問題で詳しく見るができなかったポスターをも、休み時間などに見ることができる。

二回目のセッションを自由に聴きに行ける形式とすれば、発表者ごとの聴き手の数が偏ることも予想される。実際、ある発表者には57名の子どもが聴きに集まったが、別の発表者のところには17名しか集まらなかった。しかし、17名のほうは発表者と子どもとの距離が物理的にも心理的にも近くなり、結果として他の二つの発表よりもセッションが活発となっていた。

以上の取り組みは、部会授業のリアリティを高めるための模索であった。ポスター・セッションの規模や、自由選択形式など、平成25年度の授業に比べて実際のポスター・セッションに近いものが実現された。リアリティを高めるということは、それだけ部会授業で本物の（真正の）ポスター・セッションに関する学習が行えるようになるということでもある。ポスター・セッションを実際に見る経験の少ない子どもたちにとって、本物に近いセッションを体験的に学べる場の意義は大きいと言える。この取り組みの結果、部会授業中の子どもたちの積極性と、「たかくら学習発表会」における子どもたちの発表の態度およびコミュニケーションの活発さが向上したという見解を、部員たちが共通して持つに至った。

（3）発表の内容に対する着眼点の焦点化

子どもに対する取り組みの二つ目は、子どもたちに

よる「たかくら学習発表会」において、セッションに参加する際にどのポイントに注目するかを協議したことである。これは、実質的に平成 28 年度の「発表のポイント」を補完するものである。平成 28 年度には、子どもたちの発表の質を高めるべく、発表の評価の観点を内容とパフォーマンスとに分けて考え、そのうちパフォーマンスに着目し、大人が期待するパフォーマンスをループリックとして明文化した。そうして最終的に、子どもたちの自己評価ツールである「発表のポイント」を作り上げたのであった。

そうなると、自然な流れとして、平成 29 年度の取り組みではもう一つの観点である発表の内容にコミットメントすることになる。しかしながら、「発表のポイント」と異なり、発表の内容を自己評価して改善に生かすためのツールの実現は難しい。平成 29 年度も、カリキュラム上子どもたちの事前練習が行われるのは本番間近になってからとせざるを得ない状況にあった。その中で発表の内容を改善するといった場合、ポスターを大部分書き直すことになる可能性がある。そのため、本番間近の事前練習を通して改善することは、パフォーマンスに比べてどうしても困難になる。

そこで、部会で協議した結果、発表内容に対するコミットメントの改善の策として、発表本番において子どもたちに今後の改善の方向性や留意点に気付かせるという方向性を採用することとなった。まず、パフォーマンスの場合と同様に大人がどのような発表の内容を期待するのかを絞り込む。それをループリックの形式にするのではなく、発表を参観する際の観点として、教師を含む部員全員の共通見解として持つこととする。そうした観点に注意して、部員である教員は探究的な学習を指導する。また他の部員も、本番のセッションに参加し、質問や議論を展開することで、平成 29 年度の本番の発表だけでなく、次年度以降の探究的な学習の改善に生かすことができるというものである。

参観の観点は、過去 4 年間の「たかくら学習発表会」において見られた課題をもとに選定された。具体的には次の三点である。第一に、問題意識を持って、自分の意見につなげつつ発表しているか。第二に、探究している問題が自分自身の問いになっているか。第三に、本来きっかけであるべき地点で完結することなく、自分なりの探究に昇華できているかどうかである。この

三点は、これまでの「学び部会」の取り組みにおいて課題としてたびたび指摘された点である。過去の「たかくら学習発表会」における子どもたちの発表は、発表として形になっていたとしても、障害者福祉や介護福祉の一般的な歴史や方策、施設・設備に関するものに終始しており、本当に自分の探究になっているかどうかという点で検討の余地を残していたのであった。

この三点に注意して部員の教員が探究を指導した結果、発表のテーマや結論に例年以上の個性が見られるようになった。テーマとしては、「介助犬の歴史」や「身体の不自由な人の生活」などといった一般論的なものではなく、「介助犬の数は増やせないのか」や「身体の不自由な人が暮らしやすくなるために私たちはどんなことができるだろう」といった、子ども自身の個性を引き出すものが多くなった。結論としても、例えばお金をかけずにできるような心構えや支援の提案などが多くなされていた。一般論に落ち着いた子どもも、参加した大人たちが「あなたとしてはどう考えますか」「あなたはどこが問題だと思いますか」などと焦点を絞り込んだ質問をすることで、子どもたち自身の個性的な結論を引き出すことができた。発表会の最後に部員がその点を講評することで、子どもたちは探究を自分のものとする大切さを実感した。

一方で、さらなる課題も二点生じた。第一に、探究のテーマや題材を相対化して捉えることができていないというケースである。例えば、探究に使っている資料の古さに気付かず、耳の不自由な人々に重宝されるツールとして「文字電話」をアピールする子どもが見られたということが報告された。第二に、学習の全体的なテーマが「高倉のやさしさ」であるはずなのに、発表の中に「高倉」が出てこないという点である。探究した成果が、高倉校区に住んでいる障害者にとつての「やさしさ」になりえるものかどうかを検証できていなかったり、実際に介助犬や点字が高倉校区のどこに生かされているのかが観察できていなかったりということがしばしば報告された。4 年生の子どもたちがこれらをどこまで乗り越えることができるのかも含め、今後の取り組みの中で考えていく必要がある。

ここまで述べてきたのは、子どもたちに向けての取り組みであった。平成 28 年度以前の取り組みは子どもたちを中心的な対象としたものであった。しかしなが

ら、平成 29 年度は「学び部会」の方針に「子どもと大人に発信していく」ことを盛り込んでいた。すなわち、平成 29 年度の取り組みは、大人に向けたものでもあった。この点こそ、「スマイル」ひいては学校運営協議会の活動の意義と可能性を問い直すものとなった。次節ではこの取り組みについて述べる。

4. 大人の学びに向けた取り組み

(1) 平成 28 年度以前に見られた大人側の課題

「ポスターのひみつ」と「たかくら学習発表会」が平成 25 年度以来継続して「学び部会」の介入の場であることは、ここまで述べてきたとおりである。「ポスターのひみつ」の目的の一つは、ポスター・セッションに馴染みのない子どもたちに、「たかくら学習発表会」に備えてポスター・セッションの理念と方法を体験的に学んでもらいたいということにあった。

ポスター・セッションに馴染みが無いという点は、子どもだけでなく一般的な大人にも当てはまる。これまで教育を受けてくる中で、あるいは何らかの仕事に従事する中でポスターによる発表を経験したことがあるという場合を除けば、ポスター・セッションに理解がある大人はほとんどいない。

そもそも「学び部会」の部員ですら同様である。だからこそ、新年度に取り組みを始めるにあたり、新規部員とポスター・セッションに関して共通理解を図ることから出発しなければならない。そのために、9 月にかけて行われる、堀川高校の生徒が課題研究の成果をポスター・セッションで発表する探究基礎発表会に部員が足を運び、見学するという機会が設けられているのである。そうした機会を通してポスター・セッションについてひととおり理解を持ったうえで、部会授業に向けた準備を進めるのである。

「たかくら学習発表会」には、子どもたち、「学び部会」部員、教職員の他に、子どもたちの保護者も参加する。当然、保護者の多くはポスター・セッションに不慣れであるし、発表会当日までポスター・セッション形式での発表であることを知らされていないこともある。そのため、発表者が発表内容を話している途中で質問が投げかけられるというポスター・セッションの特徴に馴染みが無い。普通は発表者である子どもがひととおり内容を話し終えたあとで質疑応答に移る

もので、そうした流れを乱すべきではない、乱してはいけないものだと考えている保護者も多い。

そのこともあり、「学び部会」では課題となる事例が幾度か報告されてきた。「たかくら学習発表会」において、「学び部会」の部員や聴き手の子どもが発表の途中で質問等を差し挟もうとしたときに、発表者の子どもの保護者が抵抗感を覚え、それを制止するという事例である。そのような行為ももつともであるが、「たかくら学習発表会」をポスター・セッション形式で行っていることの意義が薄れてしまうという点からすれば、解決すべき課題であると判断される。

そこで平成 29 年度には、そうした保護者に対してポスター・セッションとは何か、なぜこの形式でやっているのかを理解してもらうための方策について議論を重ねた。既に述べた、「学びを豊かにし、広めていくための方法について、子どもと大人、みんなで学んでいけるよう」にするというキャッチコピーの理念の通りである。次項に実際に行った施策を述べる。

(2) どのように大人に発信するか

まず講じられた策は、「たかくら学習発表会」のセッションの合間に、ミニ・レクチャーという形でポスター・セッションの説明を行うという方法である。「たかくら学習発表会」においてセッションは四回行われる。セッションとセッションの間には数分程度のインターバルが設けられ、その間にポスターを転換して、発表者の交替を行うのである。この時間を生かしてミニ・レクチャーを試みれば、保護者にもポスター・セッションに対する理解を求めることができるほか、子どもたちにも改めて発表形式に関して指導ができる。

しかし問題は、これをいつ実施できるのかという点であった。インターバルは三回あるが、それらすべてにおいてまったく同じ説明をするのは不自然である。また、仕事等の都合により二回目以降のセッションから参加する保護者も多く、その全員に一律に説明を受けてもらえるような場を確保するのは困難である。

そこで考えられたのが、普段各クラスで配布している「学級だより」を活用するという策であった。「学級だより」の趣旨からして当然、「たかくら学習発表会」の開催に関する情報は毎年掲載されている。その中で、ポスター・セッション形式で発表が行われるというこ



図1 「たかくら学習発表会」前後の「学級だより」
(4年生担任・榊原広先生提供)

とを説明しておけばよいのではないかという結論である。図1の左側は、実際に作成された「学級だより」(写真未添付)であり、「ポスター・セッションという形式で発表」するということが明記されている。また右側は発表会後に別のクラスで配布された「学級だより」であり、「聞きながらたくさん質問してもらおうことで、今まで調べてきたこと以上に内容の深い発表をすることができました」としてポスター・セッションの意義が記されている。家庭と学校をつなぐ連絡手段の一つである「学級だより」が、まさに保護者の学びのツールとして活用されたのであった。

こうして、「たかくら学習発表会」におけるミニ・レクチャーと「学級だより」の活用という二つの方策を併せた結果、平成29年度発表会では不満の声が聞かれることはなく、子どもと大人とがともに充実した学びの時間を過ごすことができた」と評価される。

5. おわりに

以上、平成29年度の「学び部会」の取り組みを、それまでに表出してきた課題と結びつける形で報告・検討してきた。子どもたちに向けた取り組みとしては、部会授業「ポスターのひみつ」のリアリティの向上による真正の学習の場づくりと、発表内容の質を高めるための指導および質問・コメントの焦点化とが行われた。また、大人に向けた取り組みとして、ポスター・セッションに対する保護者の理解を得るために、「学級だより」を活用したうえで「たかくら学習発表会」の合間にミニ・レクチャーを実施することとした。

こうした取り組みから、「スマイル」の「学び部会」が発揮した独自性は次のようにまとめられる。すなわち、「学び部会」は、学校、家庭、地域と教育関係者の代表者によって構成され、協議して意思決定を行い、子どもを中心として学校教育のステイクホルダー全体における学びの向上を図る、継続性ある機関として位置づけられる。取り組みとしては学校の学習指導に介入するものを行っていないが、放課後学習や土曜学習のボランティアとは別の性格を持つ組織である。学校・家庭・地域の連携の一形式と捉えられるが、大人への発信という点が取り組みの課題となったことから窺えるように、同じ〈家庭〉であっても、保護者の部員は〈学校〉と〈家庭〉とをつなぐ独自の役割を果たすことになる。地域住民の部員も同様である。

残された課題としては、実際に「学び部会」の取り組みが保護者の理解向上にどれだけ寄与したのか、あるいはどれほど大人の学習に介入可能性を見出すことができるのかを評価することである。「たかくら学習発表会」を参観する保護者は年々増加傾向にあり、アンケートができれば、定量的な評価も可能であるような水準となってきた。そうした評価をもとに、より質の高い「子どもと大人、みんなで学んでいける」取り組みを実現していくことが求められる。

註

- 1 福嶋祐貴「学校・家庭・地域の協働によるルーブリックづくりとその活用：京都市立高倉小学校『スマイル21プラン委員会』の取り組み」京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座『教育方法の探究』第20号、2017年、p.38。
- 2 文部科学省生涯学習政策局・初等中等教育局「地域学校協働活動事例集」2016年。
- 3 武井哲郎『「開かれた学校」の功罪』明石書店、2017年、p.259。
- 4 同上書、p.260。
- 5 同上書、p.266。
- 6 同上書、p.12。
- 7 京都市立高倉小学校「総合学習『たかくら』プラン」
[http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/takakura-s/takapuran.htm]
(2018年3月15日最終確認)。

(盛岡大学文学部児童教育学科・助教)

受理 2018年6月11日